

長谷川端蔵 『源氏物語』 玄陳筆 「帚木」

長谷川 端（文責）

駒田貴子  
村井俊司

解題

一、書誌

本書は長谷川端蔵『源氏物語』五十四帖揃、付『源氏物語筆者目録』、『源氏物語秘訣』各一冊の中の玄陳筆「帚木」である。綴葉装、縦二十三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子である。題簽は、中央上部に金銀泥及び彩色にて、伝説にいう信濃の園原にあつた帚木の下絵を描き、「はゞき」

と墨書きする。

全丁数は四十八丁、墨付四十六丁、遊紙前後各二丁。内題はなく、一面十行、和歌は改行して二字下げで記し、そのまま本文を続けている。字数は四丁二十八字、字高は十九糎。奥書、識語はない。

なお、この『源氏物語』五十四帖揃の昌琢筆「桐壺」<sup>2</sup>、西山宗因筆「紅葉賀」<sup>3</sup>、「宿木」<sup>4</sup>は、既に解題を付し翻刻した。

## 二、玄陳と本書の書写

玄陳については、藤本箕山編『顯伝明名録』<sup>5</sup>に、

玄仍子紹巴孫号徳臨庵法眼寛文五乙巳正月五日卒

と記すように、紹巴の孫で玄仍の長男である。母は、昌叱の女、弟に玄的があり、この『源氏物語』揃の巻頭「桐壺」を書写した昌琢は叔父にあたる。

その生涯は、玄陳自筆『忠度百首』<sup>6</sup>の巻末に「寛文二年五月日 七十二歳 法眼玄陳 印（写真）」とあり、寛文二年（一六六二）には「七十二歳」であったとわかり、生年は天正十九年（一五九一）となる。没年は、先の『顯伝明名録』に「寛文五乙巳正月五日卒」とある。これらにより、天正十九年（一五九一）から寛文五年（二六六五）一月五日に七十五歳で没するまでが、その生涯となる。里村家の人々の没年と玄陳の年齢を記せば、

年号

歳 記事

天正一九年（一五九一）

1 出生。

慶長 七年（一六〇二）	12	紹巴没。
八年（一六〇三）	13	昌叱没。
十二年（一六〇七）	17	父、玄仍没。
寛永十三年（一六三六）	46	昌琢没。

となる。この中で十七歳で父玄仍が没した環境が、玄陳の連歌師としての活動に与えた影響は少なくないといえる。例えば、『滑稽太平記』<sup>7)</sup>にある、

有年の七月七日、東門跡の東泰院興行にて、昌琢・玄陳・昌俔・貞徳も出座し誹諧有。何れも連歌の達人なれども、誹諧なれば、貞徳坐をさばきけり。貞徳発句に、

秋立や影向の枝花の奥

是にて百句半成しに、「節分」と云句出る。玄陳「春なり」といへり。貞徳聞て、「節分尤四季に有といへども、一年の限といふ、春を迎へて節、陰陽のさかひ、冬の季なり。易を考て見られぬるか。連歌は昌琢、誹諧は愚さばきなり。其方は未若し。能思慮してものはいわれよ。」と異見せらる。昌琢、「いかにも翁の云わるゝ所尤なり。冬の季に限れり。」と申されき。

という部分は、玄陳も「連歌の達人」<sup>8)</sup>と記されるが、貞徳に「異見」をいわれている姿は、後見のない立場を現わしているように見える。実父玄仍亡き後、里村家の中心であったのは、叔父の昌琢である。昌琢は連歌界の大宗匠でもあり、この昌琢の地位が、この『源氏物語』<sup>9)</sup>揃の書写に深く関わっていた。

そして、玄陳が書写を担当しているこの「帚木」を含む『源氏物語』五十四帖揃の書写年代は、寛永の早い時期、寛永四年（一六二七）から六年（一六二九）と考えられた<sup>10)</sup>。玄陳の年齢でいえば、三十七歳から三十九歳に





	九月十八日	九月十八日	九月二十九日	十月九日	十月晦日	十一月二十二日
48						
5						
45						
47						
36						
10						
11						
20						
5						
13						
1						
1						

この表から、里村一族との同座が圧倒的に多いとわかる。昌琢と昌俔は母方の叔父、玄仲は父方の叔父、そして、玄的は弟である。里村一族が揃って出座する連歌会に、玄陳も加わっているのである。こういった一族の結束は、この『源氏物語』揃の書写の特徴ともなっている。巻頭を昌琢が書写し、巻末を玄仲が担当している点や、一人の書写者が一卷のみを受け持つのが多い中であって、里村一族やその一門が、複数の巻を書写しているからである。複数の巻の書写者は、「筆功」と記される「岡本主水」を除く五人で、玄陳、昌俔、宗因、了俱、宗具である。伝末詳の宗具を除き、全て里村家のこの当時の中心人物である昌琢に近い人々で占められている。

複数の巻を書写した中でも玄陳は、「帚木」「関屋」「藤裏葉」の三巻を書写しており、筆功の岡本主水に次いで二番目に書写巻が多いのである。これは、玄陳の積極的なこの『源氏物語』書写への関与を示すと同時に、そこには、玄陳の連歌師としての『源氏物語』に対する関心の深さもあると考えられる。

玄陳の名前が見える元文四年（二七三九）の年号を持ち、「古筆了延」の署名のある「源氏物語 御筆者」という書き付けの中に、「連歌師」として、

帚木 連歌師昌琢

葵 連歌師玄陳  
 榊 連歌師宗順  
 乙女 連歌師玄陳  
 槓柱 連歌師玄陳  
 柏木 連歌師昌倪  
 竹川 連歌師宗順

という記載がある。ここでも玄陳は、三巻を担当している。この書き付けには、公家や僧侶などの名前も見られるが、書写巻は一人一巻が多い中で、玄陳の三巻の書写は、他にはなく注目される。この理由としては、先に述べた連歌師としての『源氏物語』に対する関心が掲げられる。宗祇や紹巴の例を引くまでもなく、連歌師にとって『源氏』は基礎知識であり、父玄仍も三十七年という短い人生の中で、『源氏物語註』<sup>13</sup>を残しており、この注釈書はその長子である玄陳も目にしていたと思われる。そして、もう一点は玄陳が書写に堪能であったという点を考えたい。この書写に堪能であった点を含め、次ぎに玄陳の筆跡に触れる。

### 三、玄陳の定家様

本書の筆跡(写真) ( )と先に触れた玄陳筆『忠度百首』(写真) ( )、そして短冊(写真)<sup>14</sup> ( )でわかるように、玄陳の手は明らかに定家様といえる。

定家様は、冷泉家の歴代の人々や近衛信尹、小堀遠州、烏丸光広などによって書かれ、茶道家の定家尊重がそ

の流行の原因だといわれる。<sup>15</sup>そして、その愛玩について、小松茂美氏は、「天正から文禄・慶長にかけての定家の筆跡といえば、ほとんどがこの小倉色紙一辺倒であった。」という指摘がある。言い換えれば、小倉色紙によって、定家様は流布したのである。この小倉色紙に関しては、玄陳も、松平不昧の『古今名物類聚』<sup>17</sup>に、

一 みせはやな 玄陳

とあり、殷富門院大輔の歌の色紙を所有していた。また、同書には、

一 人もおし 里村昌程

後土屋相模守

とあり、玄陳の婿の昌程（昌琢の子）も、後鳥羽院の歌の小倉色紙を所有していたと記されている。この昌程の所有については、所伝小堀遠州の『玩貨名物記』<sup>18</sup>にも、

一 人もおし 昌程

一 いにしへの 同

後藤庄三郎

と記されている。この『玩貨名物記』に、玄陳の小倉色紙所有の記載は見られない。

言うまでもないが、定家様で書くには、定家尊重に加えて自身の才能が当然、必要であり、玄陳はその才能に恵まれていたといえる。玄陳の伝記を記す、江戸時代の伝新井白石の『画工（巧）便覧』<sup>19</sup>には、

玄陳 住「泉堺」連歌匠也 常好「和絵」画又加「其賛」

と記され、明治期の北村佳逸編『名家鑑定美術必携 日本画人伝』<sup>20</sup>巻六に、

里村玄陳 和泉堺ノ人ナリ、紹巴ノ孫ニシテ和歌ヲ能クシ、画モ妙ナリ



とあるように、絵画にも造詣が深かったのである。これは先の定家様の筆跡と軌を一にする玄陳の才能といえる。つまり、本書は美術の方面からも、注目すべきなのである。

#### 四、結語

かつて豪商が行政を執り、千利休や牡丹花肖柏ら文化人も住んだ自治都市堺に、玄陳は住んでいた。『堺市史』には、「連歌師として在住した里村玄陳は、紹巴の孫に当り」と記し、次のように伝記を載せる。<sup>(23)</sup>

里村玄陳は紹巴の孫、玄仍の男である。堺に住し、連歌を以て聞こえ、傍ら絵画を善くし、書法に達した。

法眼に叙せられてゐる。(続本朝画史卷之下) 寛文五年正月五日歿した。享年七十五。(日本書画名家編年史

卷四上)

この『続本朝画史』<sup>(23)</sup>『日本書画名家編年史』<sup>(24)</sup>という美術書からの引用が示すように、玄陳は画人としても認知されていた。その絵画面での業績としては、『国書総目録』<sup>(25)</sup>に「競馬図巻」が見られる。

玄陳が起居した頃の堺は、幕府の枠組みに組み込まれ、既に自治都市、自由都市の繁栄は失われていたが、連歌の家として紹巴、玄仍の流れを汲む嫡子の玄陳が、京都を出て堺に住んだ足跡は注目される。この堺在住を含め、連歌師玄陳の姿を当時の社会状況から考え、まとめたい。

幕府による封建制度が確立する社会に於いて、連歌師も昌琢が柳営連歌の宗匠となり、その体制に組み込まれていた。これについて、奥田勲氏<sup>(26)</sup>は、

実力でせめぎ合った連歌師たちの群像はなく、幕府という絶対権力によりそって、その年中行事に組み込ま

れた形で連歌の制作・指導を続けて行く家柄の姿しかない。

と指摘する。これは、連歌のみではなく、千利休によって一世を風靡した茶道でも同じ状況が生まれている。幕府による柳営茶道の誕生があり、それについて、桑田忠親氏<sup>27</sup>が「非常に形式は整ってきませんが、実がなくなってしまうのです。」と、述べる通りである。共に幕府の体制確立による伝統文化の変容といえる。こういつた社会を生きる玄陳は、亡父玄仍、そして今、里村家の柱である叔父昌琢からすると、次世代の連歌師である。そこには、乱世は終息し、太平の世となり、幕府の体制が確立した社会を生きる、新しい連歌師の姿があるといえる。

玄陳と同じく定家様で知られ、寛永文化を代表する茶人小堀遠州は、「中興名物というものも選定したり、それから、道具の極め書とか箱書・箱・上箱・中箱などを整備します。」と、先の桑田氏は言う<sup>28</sup>。これは正しく茶道の形式化といえるが、それを当時の特質と捉えれば、玄陳が連歌の周辺の書や絵画にも、その才能を発揮し、父祖の地京都を出て堺に住んだのも、江戸初期という時代の風をとらえて生きる連歌師の姿が窺えるといえる。

つまり、玄陳筆の流麗な定家様で書写された本書が備わっているこの『源氏物語』揃は、江戸初期の『源氏物語』本文を、今日に如実に伝えると同時に、美術品としての価値も有する。また、様々な観点からの検証によって、寛永の社会や文化を構想するのにも有益な一書なのである。

## 翻刻凡例

- 一、翻刻に際しては、原本に忠実であることを旨として、仮名遣は原本通りとした。
- 一、和歌は改行をし、二字下げとした。
- 一、本文の傍書は原本通りとした。
- 一、漢字の踊字「く」は、そのままとした。
- 一、錯簡がある。17丁才〜20丁ウを、12丁ウの次に置き、正しい本文として翻刻した。

(はゞき)

光源氏名のみことくしういひけたれたまふとか

おほかなるにいとくかゝるすきことをもをす糸の世にも

きつたへてかろひたる名をやなかさむとしのひ給

けるかくろへことをさへかたりつたへけむ人のものいひさ

かなさよさるはいといたく世をはかりまめたち給ける

ほとなよひかにおかしきことはなくてかたの少将には

わらはれ給けむかしました中將などにもものし給し時

はうちにのみさぶらひよつしたまひておほいと

にはたえくまかて給しのふのみたれやとうたかひき

こゆる事もありしかとさしもあためきめなれたる

1才

うちつけのすきくしきなとはこのましからぬ御ほん上

にてまれにはあながちにひきたかへ心つくしなる事

を御心におほしとむるくせなむあやにくにてさる

ましき御ふるまひもうちましりけるなかな雨はれまな

きころうち御物いみさしつきていとくなかなさぶらひ

給をおほいとにはおほつかなくつらめしとおほしたれ

とよつ御よそひなにくれとめつらしきさまにてう

し出給つ御むすこの君たちたこの御とのあ所の宮

つかへをつとめたまふ宮はらの中將はなかにしたしくな

れきこえたまひてあそひたはふれをも人よりは心や

1ウ

すくなれくしくふるまひたり右のおとくのいたはりか

しつきたまふすみかはこの君もいと物つくしてすき

かましきあた人なりさにても我方のしつらひまは

ゆくして君の出入し給にうちつれきこえ給つよるひ

るかくもむをもあそひをももるともにしておさくた

ちをくれすいつくにてもまつはれきこえたまふほとにを

のつからかしこまりもをかす心のうちにおもふ事をもか

くしあへすなんむつれきこえ給けるつれくとふりくらし

てしめやかなるよひの雨に殿上にもおさく人すくなに

御とのゐ所もれいよりはのとやかなる心地するにおほと

2才

なぶらちかくてふみともなと見給ちかきみつしなる

色／＼のかみなるふみともをひきいて、中將わりなくゆか

しかればさりぬへきすこしはみせむかたはなるへきも

こそとゆるし給はねはそのうちとけてかたはらいたし

とおほされむこそゆかしけれをしなへたるおほかたの

はかすならねとほと／＼につけてかきかはしつゝも見侍

なむをのかしゝうらめしきおり／＼まぢかほならむ夕暮

などのこそ見所はあらめとえむすればやむことなく

せぢにかくし給へきなとはかやうにおほそつなるみつ

しなとにうちをきぢらし給へくもあらすふかくとり

2ウ

をき給へかめればこれは二のまちの心やすきなるへしか

たはしつゝみるによくさま／＼なる物ともこそ侍けれとて

心あてにそれかかれかなことふなかにいひあつるもあり

もてはなれたることをもおもひよせてうたかふもおかしと

おほせとことすくなにてとかくまきはしつゝとりかくし給

つそこにこそおほくつとへ給らめすこしみはやさてなむこ

のつしも心よくひらくへきとの給へは御らむし所あら

むこそかたく侍らめなときこえ給つめてに女のこれは

しもとなむつくましきはかたくもあるかなとやう／＼

なむみ給するたゝうはへはかりのなさけにてはしり

3オ

かきおりふしのいらへ心えてうちしなとはかりはすいぶん

によるしきもおほかりとみ給ふれとそもまことにその

かたをとりいてむえらひにかならずもるましきはいと

かたしや我心えたる事はかりをゝのかしゝ心をやりて

人をおとしめなとかたはらいたき事おほかりおやなと

たちそひもてあかめておひさきこまれるまとのうちな

るほとはたゝかたかとをきゝつたへて心をうこかすこと

あめりかたちおかしくうちおほときわかやかにてまき

るゝ事もあるにをのつからひとつゆへつけてしいつる

事もありみる人をくれたるかたをはいひかくしさて

3ウ

ありぬへきかたをはつくるひてまねひいたすにそれ

しかあらしとそらにいかゝはをしはかりおもひくたさむま

ことかともめてゆくにみをとりせぬやうはなくなむある

へきとうめきたるけしきもつかしけなれはいとなへては  
 あらねと我もおほしあはすることやあらむうちほゝ糸みて  
 そのかたかともなき人はあらむやとのたまへはいとさばかり  
 ならむあたりにはたれかはすかされより侍らむとるかたなく  
 くちおしきゝはといふなりとおほゆはかりすくれたるとはかす  
 ひとしくこそ侍らめ人のしなたかくむまれぬれば人にも  
 てかしかれてかくるゝ事おほくしねんにそのけはひこ

4才

よなかるへし中のしなになむ人の心ゝをのかしゝの  
 たてたるおもむきもみえてわかるへきことかたゝおほ  
 かるへきしものきさみといふきはになれはことにみゝたゝ  
 すかしていとくまなけなるけしきなるもゆかしくて  
 そのしなゝゝやいかにいつれを三のしなにおきてかかく  
 へきもとのしなたかくむまれながら身はしつみくらぬ  
 みしかくて人けなき又なを人のかむたちめなとまで  
 なるのほりたる我はかほにていゑのうちをかさり人にを  
 とらしとおもへるそのけちめをはいかゝわくへきとゝひ給  
 ふほとに左の馬のかみ藤式部のせう御物忌にこもら

むとてまいれり世のすきものにてものよくいひとをれ  
 るを中将まちとりてこのしなゝゝをわきまへさため  
 あらそふいとぎゝにくきことおほかりなりのほれとももとより

4ウ

さるへきすぢならぬは世の人のおもへる事もさはいへと  
 なをことなり又もとはやむことなきすぢなれと世にふる  
 たつきすくなく時世うつろひておほえをとるへぬれば  
 心は心としてことたらすわるひたる事ともいてくるわさ  
 なめれはとりゝにことはりて中のしなにそをくへきす  
 りやうといひて人のくにのことにかゝつらひいとなみてしな  
 さたまりたる中にも又きさみゝありて中のしなのけ

5才

しうはあらぬえりいてつへきころほひなりなまゝゝのかん  
 たちめよりも非参議の四位ともの世のおほえくちおし  
 からすもとのねさしいやしからぬかやすらに身をもてなし  
 ふるまひたるいとかはらかなりやいゑのうちにたらぬ事など  
 はたなかめるまゝにはふかすまはゆきまでてかしかしつけ  
 るむすめなどのおとしめかたくおひいつるもあまたある

へし宮つかへにいてたちておもひかけぬさいはひとりいつる  
 ためしともおほかるかしなといへはすへてにきはしき  
 によるへきなむやとてわらひ給をこと人のいはむやうに  
 心えすおほせらるとて中将にくむもとのしな時代の

5ウ

おほえうちあひやむことなきあたりのうちくのもてなし  
 けはひをくれたらむはさらにもいはすなにをしてかくおひ  
 いてけむといふかひなくおほゆへしうちあひてすくれ  
 たらむもこはりこねはまへへきこくおほえてめつらか  
 なることこもおとろくましなにかしかをよふへきほとな  
 らねはかみかかみはうちをき待ぬさてよにありと人  
 にしられすさひしくあはれたらむむくらのかこに  
 おもひのほかにらうたけならむ人のとぢられたらむこ  
 そかきりなくめつらしくはおほえめいかてはたかよりけん  
 と思よりたかへることなむあやししく心とまるわさなり  
 ちくのとしおい物むつかしけにふとりすきせうとのか  
 ほにくけにおもひやりことなることなきねやのうちに

6オ

いといたくおもひあかりはかなくしてたることわさも  
 ゆへなからすみえたらむかたかかにてもいかおもひの  
 ほかにおかしからさらむすくれてきすなきかたのえら  
 ひにこそをよはさらめさるかたにてすてかたき物  
 をはとて式部をみやれば我いもつものよろ  
 しきこえあるを思ての給ふにとや心うらむも  
 のもいはすいてやかみのしなと思にたにかたけなる  
 世をと君はおほすへししろき御そともものなよ

6ウ

かなるになをしはかりをしとけなくきなし給てひも  
 なともうちすてそひふし給へる御ほかけいとめてたく  
 女にてみたまつらまほしこの御ためにはかみかかみを  
 えりいてもなをあまくましく見えたまふさまくの人の  
 うへともをかたりあはせつおほかたの世につけて  
 みるにはとかなきもわかものつちたのむへきをえ  
 らむにおほかる中にもえなむおもひさたまむましかり  
 けるをのこのおほやけにつかうまつりはかしくしき世の  
 かためとなるへきもまことのうつは物となるへきをと

りいたさむにはかたかるへしかしされとかしこしとても

7才

ひとりふたり世中をまつりこちしるへきならねはかみは

しもにたすけられしもはかみになひきて事ひるき

にゆつろふらむせはき家のうちのあるしとすへき

人ひとりをおもひめぐらすにたらはてあしかるへき大

事ともなむかたへおほかるとあれはかへりあふさきる

さにてなのめにさてもありぬへき人のすくなきをす

きへしき心のすさひにて人のありさまをあまた見

あはせむのこのみならねとひとへにおもひさたむへき

よるへとすばかりにおなしくは我ちからいりをしなを

しひきつくるふへき所なく心かなぶやうもやと

7才

えりそめつる人のさたまりかたきなるへしかならずし

もわかおもふにかなはねとみそめつるちきりはかりを

すてかたく思とまる人は物まめやかなりと見えさて

たもたるゝ女のためも心にくゝをしはからるゝなりさ

れとなにか世のありさまを見給へあつむるまゝに心

にをよはずいとゆかしきもなしや君たちのかみなき御

えらひにはましていかがはかりの人はたくひ給はむかたち

きたなげなくわかやかなるほどのをかしゝはちりも

つかしと身をもてなし文をかけとおほとかにこと

えりをしすみつきほのかに心もとなくおもはせつゝ

8才

又さやかにもみてしかなとすへなくまたせわつかなる

こゑきくはかりいひよれといきのしたにひきいれこと

すくなゝるかいとよくもてかくすなりけりなよひかに

女しとみればあまりなさけにひきこめられてとり

なせはあためくこれをはしめのなむとすへしことか

中になのめなるましき人のうしろみのかたは物

のあはれしりすくしはかなきつゐてのなさけありお

かしきにすゝめる方なくてもよかるへしとみえたる

にまたまめへしきすちをたてゝみゝはさみかちに

ひさうなきいゑとうしのひとへにうちとけたるう

8才

しろみばかりをしてあさゆぶのいていりにつけてもおほ



やけわたくしの人のたゝすまひよきあしき事のめに  
 もみゝにもとまるありさまをうつとき人にわざとつ  
 ちまねはむやはちかくてみむ人のきゝわきおもひ  
 するへからんにかたりもあはせはやとうちもゑまれ  
 なみたもさしくみもしはあやなきおほやけは  
 らたゝしく心ひとつにおもひあまることなどおほかる  
 をなにゝかはきかせんとおもへはうちそむかれて人  
 しれぬ思いてわらひもせられあはれともうちひとりこ  
 たるゝになに事ぞなとあはつかにさしあふぎぬたら  
 むはいかゝはくちおしからぬたゝひたふるにこめきてや  
 はらかならむ人をとかくひきつくるひてはなとかみ  
 さらん心もとなくともなをしところある心ちすへし  
 けにさしむかひてみむほとはさてもらうたきかたに  
 つみゆるしみるへきをたちはなれてはさるへきこ  
 とをもしひやりおりふしにしてむわさのあたこと  
 にもまめことにも我心と思つる事なくぶかきいた  
 りなからんはいとくちおしくたのもしけなきとかや

9才

猶くるしからむつねはずこしそはくしく心つきな  
 き人のおりふしにつけていてはへするやつもあり  
 かしなとくまなきものいひもさためかねていたくつちな  
 けくいまはたゝしなにもよしかたちははさらにもい  
 はすいとくちおしくねちけかましきおほえたになくは  
 たゝひとへに物まめやかにしつかなる心のおもむきなら  
 むよるへをそつぬのたのみ所にはおもひをくへかりける  
 あまりのゆへよし心はせうちそへたらむをはよるこひに  
 おもひすこしをくれたるかたあらむをもあなちにもとめ  
 くはへしうしろやすくのとけき所たにつよくはつはへ  
 のなさけはをのつからもてつけつへきわさをやえんに  
 物はちしてうらみいふへき事をも見しらぬさまにしのひ  
 てうへはつれなくみさほつくり心ひとつにおもひあまる  
 時はいはむ方なくすこきことの葉あはれなるうた  
 をよみをきしのはるへきかたみをとめてぶかき山  
 里の世はなれたるうみつらなとはひかくれぬがし

9才

10才

わらはに侍し時女房などの物かたりよみしをきゝて  
いとあはれにかなしくゝるふかき事かなとなみた  
さへなむおとし侍しいまおもふにはいとかるくしくこと  
さらひたる事なり心さしふかゝらんおとこをゝきてみる  
めのまへにつらき事ありとも人の心をみしらぬやう  
ににけかくれて人をまとはし心をみむとするほどに

10ウ

なかき世の物おもひになるいとあちなき事なり  
心ふかしやなとほめたてられてあはれすゝみぬれはや  
かてあまになりぬかし思たつほとはいと心すめるやうに  
てよにかへりみすへくもおもへらすいてあなかなしく  
はたおほしなりにけるよなとやうにあひしれる人きとぶ  
らひひたすらにうしともおもひはなれぬおとこきゝつ  
けてなみたおとせはつかふ人ぶるこたちなと君の御心  
はあはれなりける物をあたら御身をなといふみつから  
ひたひかみをかきさくりてあへなく心ほそければう  
ちひそみぬかしのふれとなみたこほれぬれはあり

11オ

おりことにえねんしえずくやしき事もおほかめるに仏  
もなかく心きたなしと見給ひつへしにこりにしめるほと  
よりもなまうかひにてはかへりてあしき道にもたゝよ  
ひぬへくそおほゆるたえぬすくせあさからてあまにもな  
さてたつねとりたらむもやかてあひそひてとあらむあり  
もかゝらむきさみをもみすくしたらむ中こそちきりぶ  
かくあはれならめわれも人もうしろめたく心をかれしやは  
又なのめにつつろふかたあらむ人をうらみてけしきはみそ  
むかんはたをこがましかりなむ心はうつろふかたありともみ  
そめし心さしいとおしくおもはゝさるかたのよすかにおも

11ウ

ひてもありぬへきにさやうならむたちるぎにたへぬへきわ  
さなりすへてよろつことなたらかにえんすへき事をは  
見しれるさまにほのめかしうらむへからむふしをもにくか  
らすかすめなさはそれにつけてあはれもまさりぬへしおほ  
くはわか心も見る人からおさまりもすへしあまりむけに  
うちゆるへ見はなちたるも心やすくらうたきやうな  
れとをのつからかるきかたにそおほえ侍かしたつなぬ

舟のうきたるためしもけにあやなしさは侍らぬか  
 いへは中将つなつくさしあたりておかしともあはれとも  
 心にいらん人のたのもしけなきうたかひあらむこそ大

12才

事なるへけれわか心あやまちなくてみすくさはさし  
 なをしてもなとか見さらむとおほえたれとそれさしも  
 あらしともかくもたかふへきふしあらむをのとやかに見  
 しのはむよりほかにます事あるまじかりけりといひて  
 わかいてもとのひめ君はこのさためにかなひ給へりとお  
 もへはきみのうちねふりてことはませ給はぬをさうく  
 しく心やましとおもふむまのかみ物さためのはかせに  
 なりてひゝらきゐたり中将はこのことはりきゝはてむと心  
 にいれてあへしらひぬ給へりよるつこのことによそへて  
 おほせ木の道のたくみのよるつの物を心にまかせて  
 つくりいたすもりむしのもてあそひものゝその物とあ  
 ともさたまらぬはそはつきされはみたるもけにかうもし  
 つへかりけりと時につけつゝさまをかへていまめかしきに

12才

めうつりておかしきもあり大事としてまことにうるはし  
 き人のてうとのかざりとするさたまれるやうあるもの  
 をなむなくしいつる事猶まことの物の上すはさまこと  
 に見えわかれ侍又ゑ所にしやうすおほかれとすみかき  
 にえらはれてつきくゝにさらにをとりまさるけちめふとし  
 も見えわかれすかゝれと人のみをよはぬほうらいの山  
 あら海のいかれるいをのすかたから国のはけしきけたもの  
 のかたちめに見えぬをにのかほなどのおとろくしく  
 つくりたる物は心にまかせてひときはめをとるかして  
 しちにはにさらめとさてありぬへしよのつねの山のたゝ  
 すまゐみつのなかれめにちかき人のいゑゐありさまけ  
 にとみえなつかしくやはらひたるかたなをしつかにかき  
 ませてすくよかならぬ山のけしき木ふかくよはなれて  
 たゝみなしけちかきまかぎの中をはその心しらい  
 をきてなとをなむ上すはいといきほひことにわるも  
 のはをよはぬ所おほかめるてをかきたるにもぶかきこと  
 はなくてこゝかしこのてむなかにしりかきそこはかと

17才

なくけしきはめるはうち見るにかとくしくけしきた  
 ちたれとなをまことのすちをこまやかにかきたるは  
 うはへのふてきてみゆれといまひとたひとりなら  
 へて見れば猶しちになむよりけるはかなき事たに  
 かくこそ侍れまして人の心のときにあたりてけし  
 きはめらむ見るめのなさけをはえたのむましく  
 おもふ給へえて侍るそのはしめの事すくしく  
 とも申侍らむとてちかくるよれば君もめさまし給  
 ぶ中将いみしくしむしてつらつ氣をつきてむかひる  
 給へりの師の世のことはりときくかせむ所の心  
 地するもかつはおかしけれとかくるつてはをのくむ  
 つこともえしのひとめすなむありけるはやうまたいと  
 けらうに侍し時あはれとおもふ人侍きこえさせつる  
 やうにかたちなといとまほにも侍らざりしかはわかき  
 ほとんすき心ちにはこの人をとまりにともおもひ  
 とめ侍らすよるへとおもひなからさうしくて

17  
ウ18  
オ

とかくまきれ侍しをもの氣んしをいたくし侍しかは  
 心つきなくいとくられおいらかならましかはとおもひ  
 つあまりいとゆるしなくうたかひ侍しをうるさく  
 てかくかすならぬ身をみもはなたてなとかくしも  
 おもふらむと心くるしきありくも侍てしねむに心おさ  
 めらるやうになむ侍しこの女のあるやうもとより  
 おもひいたらざりけることにもいかてこの人のためには  
 となきをいたしをくれたるすちの心をもなをくち  
 おしくは見えしとおもひはけみつとにかくにつきて  
 物まめやかにうしるみつゆにても心にたかぶ事は  
 なくもかなとおもへりしほとにすめるかたとおもひしか  
 ととかくになひきてなよひゆきみにくきかたちを  
 もこの人にみやうとまれむとわりなくおもひつくるひ  
 うとき人に見えはおもてふせにや見えむとはかり  
 はちてみさほにもてつけてみなるま心に心もけし  
 うはあらず侍しかたとこのにくきかたひとつなむ心

18  
ウ19  
オ

おさめす侍しそのかみおもひ侍しやうかうあなかに  
 したかひおちたる人なめりいかてころはかりのわざして  
 おとしてこのかたもすこしよろしくもなりさかなさ  
 もやめむとおもひてまことにうしなともおもひて  
 たえぬへきけしきならばかはかり我にしたかふこゝろ  
 ならばおもひこりなむとおもひ給てことさらになさけ  
 なくつれなきさまを見せてれいのはらたちえんする  
 をかくおそましくはいみしきちきりふかくともた

19  
ウ

えて又みしかきりとおもはゝかくわりなき物うたかひ  
 はせよゆくさきなかくみえむとおもはゝつらき事あ  
 りともねむしてなのおもひなりてかゝる心たに  
 うせなはいとあはれとなむおもふへき人なみゝにも  
 なりすこしおとなひむにそへて又ならぶ人なくあるへ  
 きなとかしこくをしへたつるかなとおもひ給て我た  
 けくいひそし侍にすこしうちわらひてよろつに見  
 たてなくものけなきほどをみすくして人がすなる  
 世もやとまつかたはのとかにおもひなされて心やま

しくもあらすつらき心をしのひておもひなをらむお

りをみつげむ年月をかさねむあひなたのみはいと  
 くるしくなむあるへければかたみにそむきぬへきゝ  
 さみになむあるとねたけにいふ時にはらたゝしく  
 なりてにくけなる事ともをいひはけまし侍に女も  
 えおさめぬすちにておよひひとつをひきよせてく  
 いて侍りしをおとろゝしくかこちてかゝるきすさへつ  
 きぬれはいよゝましらひをすへきにもあらすはつ  
 かしめ給めるつかさ位いとゝしくなにとつてかは人め  
 かむ世をそむきぬへき身なめりなといひおとして  
 さらはけふこそはかきりなめれとこのをよひをかゝ  
 めてまかてぬ  
 手をおりてあひみしことをかそふればこれひ  
 とつやは君かうきふしえうらみしなといひ侍れ  
 はさすかにうちなきて

うきふしを心ひとつにかそへきてこや君かて

20  
ウ20  
オ

をわかるへきおりなといひしろぬ侍しかとまことにはか  
 はるへきことゝも思給へすなから田ころふるまでせ  
 うそこもつかはさすあくかれまかりありくにりむ  
 しのまつりのてうかくに夜ふけていみしうみそれ  
 ふるよこれかれまかりあかるゝ所にておもひめくらせは

13才

なをいゑちとおもはむかたはまたなかりけりうちわ  
 たるのたひねもすさましかるへくけしきはめるあ  
 たりはそゝささむくやとおもふ給へられしかはいかゝおもへる  
 とけしきもみかてら雪をつちはらひつゝなま入わろ  
 くつめくはるれとさりとともこよひ田ころのうらみは  
 とけなむと思給へしに火ほのかにかへにそむけなへ  
 たるきぬともあつこえたるおほいなるこにうちか  
 けてひきあくへきものゝかたひらなとうちあけてこよ  
 ひはかりやとまちけるさまなりされはよと心おこりす  
 るにさうしみはなしさるへき女房ともはかりとま

13ウ

りておやの家にこのよさりなむわたりぬるとこたへ侍

りえむなる歌もよますけしきはめるせうそこもせ  
 ていとひたやこもりになさけなかりしかはあへなき  
 心地してさかなくゆるしなかりしも我をつとみねと思  
 かたの心やありけむとさしも見給へさりしことなれと  
 心やましきまゝに思侍しにきるへき物つねよりも心  
 とゝめたる色あひしさいとあらまほしくてさすかに  
 わかみすてゝむのちをさへなむおもひやりうしる見  
 たりしさとともたえておもひはなつやうはあらしと

14才

思給てとかくいひ侍しをそむきせすたつねまとは  
 さむともかくれしのひすかゝやかしからすいらへつゝたゝあ  
 りしなからはえなむみすくすましきあらためてのと  
 かにおもひならはなむあひ見るへきなといひしをさ  
 りともえおもひはなれしとおもひ給へしかはしはしこら  
 さむの心にてしかあらためむともいはすいたくつなひ  
 きてみせしあひたにいといたくおもひなげてはか  
 なくなり侍にしかはたはふれにくゝなむおほえ侍しひ  
 とへにつちたのみたらむかたはさはかりにてありぬへく

なむおもひ給へ出らるゝはかなきあたことをもまこと  
の大事をもいひあはせたるにかひなからすたつた

14  
ウ

ひめといはむにもつきなからすたなはたの手にもをと  
るましくそのかたもくしてうるさくなむ侍しとていと  
あはれと思ひたり中将たなはたのたちぬぶかたをのと  
めてなかき契にそあえましけにそのたつたひめのに  
しきには又しく物あらしはかなき花もみちといふも  
おりふしの色あひつきなくはかゝしからぬは露のは  
へなくきえぬるわさなりさるによりかたき世とはさた  
めかねたるそやといひはやし給ふさておなし比まかり  
かよひしところは人もたちまさり心はせまことにゆへ  
ありとみえぬへくうちよみはしりかきかひゝつま

15  
オ

をと手つきくちつきみなたとゝしからす見きゝわたり  
侍きみるめもこともなく侍しかはこのさかな物をうち  
とけたるかたにて時ゝかくるへみ侍しほとはいとこよ  
なく心とまり侍きこの人うせて後いかゝはせむあは

れなからもすきぬるはかひなくてしはゝまかりなる

るにはすこしまはゆくえむにこのましき事はめ

につかぬところあるにうちたのむへくはみえずかれ

かれにのみみせ侍るほとにしのひて心かはせる人そ

ありけらし神な月のころほひ月おもしろかりし

夜うちよりまかて侍にあるうへ人きあひてこの車

15  
ウ

にあひのりて侍れは大納言の家にまかりとまらむと

するにこの人いふやう今夜人まつらむやとなむあや

しく心くるしきとてこの女の家はたよきぬみちなり

ければあれたるくつれより池の水かけみえて月たにやと

るすみかをすきむもさすかにており侍ぬかしもとよ

りさる心をかはせるにやありけむこのおとこいたくすゝ

ろきて門ちかきらうのすのこたつ物にしりかけてと

はかり月を見るきくいとおもしろくうつろひわたりて

風にきほへるもみちのみたれなとあはれとけに見えたり

ふところなりけるふえとりいてゝふきならしかけも

16  
オ

よしなとつゝしりうたふほとによくなるわこむをしら  
へとゝのへたりけるはしくかきあはせたりしほと  
けしうはあらずかしりちのしらへは女のものやはらか  
にかきなうしてすのうちよりきこえたるもいまめき  
たるものゝこゑなればきよくすめる月におりつき  
なからすおとこいたくめてゝすのもとにあゆみきて庭  
のもみちこそふみわけたるあともなけれなとねた  
ますきくをおりて

ことのねも月もえならぬやとなからつれなき人  
をひきやとめけるわるかめりなといひていま一こゑ  
きゝはやすへき人のある時にてなのこゑ給そなと  
いたくあされかくれば女こゑいたうつくろひて

木からしにぶきあはすめる笛のねをひき  
とゝむへきことの葉そなきとなまめきかはすににくゝ  
なるをもしらて又さうのことはつしきてつにしらめ  
ていまめかしくかひゝきたるつまをとかとなきには  
あらねとまはゆき心地なむし侍したゝとき〜うち

16  
ウ

かたらふ宮つかへ人などのあくまでされはみすきた  
るはさてもみるかきりはをかくもありぬへかし時  
ときにてもさる所にてわすれぬよすかとおもひ給

へむにはたのもしけなくさしくひたりと心をかれて  
その夜のことにとつてこそまかりたえにしかこのふ  
たつことをおもふ給へあはするにわかき時の心に  
たに猶さやうにもて出たる事はいとあやしめたの  
もしけなくおほえ侍きいまより後はましてさのみ

なむおもひ給へらるへき御心のまゝにおらはおちぬ  
へき萩のつゆひろはゝきえなむとみゆる玉さゝのう  
へのあられなどのえむにあへかなるすき〜しさの  
みこそおかしくおほさるらめいまさりともなゝとせあ  
まりかほとにおほししり侍なむなにかしかいやしき

いさめにてすきたはめらむ女に心をかせ給へあやま  
ちしてみむ人のためかたくなゝる心をもたてつへき  
ものなりといましむ中将れいのうなつく君すこしか

21  
オ21  
ウ



た象みてさることゝはおほすへかめりいつかたにつけても人わろくはしたなかりけるみ物かたりかなとてうちわらひおはさつす中将なにかしはしれものゝ物かたりをせむとていとしのひてみそめたりし人のさてもみつへかりしけはひなりしかはなからふへき物としも思給へさりしかとなれゆくまゝにあはれとおほえしかはたえくゝわすれぬものにおもひ給へしを

さはかりになれはうちたのめるけしきもみえきの「ママ」むにつけてはうらめしとおもふこともあらむと心ながらおほゆるおりくゝも侍しを見しらぬやつにてひさしきとたえをもかうたまさかなる人とも思たらす

たゝあさ夕にもてつけたらむありさまにみえて心くるしかりしかはたのめわたることなともありきかしおやもなくいと心ほそけにてさらはこの人こそはと事にふれておもへるけしきもらうたけな

りきかうのとけきにをたしくて久くまからざりしころこの見給ふるわたりよりなさけなうたて

22才

ある事をなむさるたよりありてかすめいはせたりける後にこそきく侍しかさるうきことやあらむともしらす心にはわすれすなからせうそなともせてひさしく侍しにむけにおもひしほれて心ほそかりければおさなき物なともありしにおもひわつらひてな

てしこの花をおりておこせたりしとてなみたくもたりさてそのふみのこと葉はととひ給へはいさやことなることもなかりきや

山かつのかきほあるともおりくゝにあはれはかけよなてしこの露おもひいてしまゝにまかりたりしかはれいのうらもなきものからいと物おもひかほにてあれたる家のつゆしけきをなかめてむしのねにきほへるけしきむかし物かたりめきておほえ侍し

さきましる花はいつれとわかねともなをとこなつにしくものそなきやまとなてしこをはさしをき

てまつちりをたにとおやの心をとる

22ウ

23才

うちほらぶ袖もつゆけきとこなつにあらし吹

そふ秋もきにけりとはかなけにいひなしてまめくし  
くつらみたるさまも見えずなみたをもらしおとし  
てもいとはつかしくつゝましけにまきはしかくして

23ウ

つらきをもおもひしりけりと見えむはわりなくくる  
しき物とおもひたりしかは心やすくて又とたえを

き侍しほとにあしともなくこそかきけちてつせにしか

また世にあらははかなき世にそさすらぶらむあは

れとおもひしほとにわつらはしけにおもひまとはす

けしき見えましかはかくもあくからざらましこよな

きとたえをかすさる物にしなしてしかはいかてた

つねむとおもひ給ふるをいまにえこそきゝつけ侍ら

れこれこそ給ひつるはかなきためしなめれなくて

つらしとおもひけるをもしらてあはれたえざりしも

24オ

やくなきかたおもひなりけりいまやうゝわすれゆくき

はにかれはたえしも思はなれすおりゝ人やりならぬ

むねこかるゝ夕もあらむとおほえ侍これなむえたも

つましくたのもしけなきかたなりけるされはかの

さかなものもおもひいてあるかたにわすれかたけれと

さしあたりてみむにはわつらはしくよくせすはあき

たき事もありなむやことのねのすゝめりけむかと

かとしさもすきたるつみをかかへしこの心も

となきもうたかひそふへければいつれとつぬにお

もひさためすなりぬるこそ世中やたゝかくこそと

24ウ

りくくらくらへくるしかるへきこのさまくくのよきか

かきりをとりくしなむすへきくさはひませぬ人は

いつこにかはあらむ吉祥天女をおもひかけむとす

れはほつけつきくすしからむこそ又わひしかりぬへ

けれとてみなわらひぬ式部か所にそけしきあること

はあらむすこしつゝかたり申せとせめらるしもか下に

はなてう事がきこしめしとこる侍らむといへとつこの

君まめやかにをそしとせめ給へはなに事をとり

申さむとおもひめくらすにまた文章の生に侍し

時かしこき女のためしをなむ見給へしかの馬頭の

申給へるやうにおほやけことをもいひあはせわたく  
しさまのよにすまふへき心をきてをおもひめく

らさむかたもいたりふかくさえのきはなま／＼の

はかせはつかしくすへてくちあかすへくもなむ侍ら

さりしそれはあるはかせのもとにかくもんなとし

侍とてまかりかよひしほごにあるしのむすめともお

ほかりとき／＼給てはかなぎつめてにいひよりて侍

しをおやき／＼つけてさか月もていて／＼我ふたつの

道つたふをきけとなむきこえこち侍しかとおさ／＼

うちとけてもまからすかのおやの心をは／＼かりてさ

25  
ウ

すかにか／＼つらひ侍しほごにいとあはれにおもひ

うしろみねさめのかたらひも身のさえつきお

ほやけにつかふまつるへき道／＼しき事を／＼しへ

ていときよけにせうそこふみにもかむなといふもの

をかきませすむへ／＼しくいひまはし侍にをのつか

25  
オ

らえまかりたえてそのものを師としてなむわつつか

なるこしをれふみつくることなとならひ侍しかは

いまにそのおむはわすれ侍らねとなつかしきさい

しとうちたのまむに無才の人なまわるならむふ

るまひなとみえむにはつかしくなむ見侍しまいて

26  
オ

君たちの御ためはか／＼しくした／＼かなる御うしろみ

はなに／＼かはせさせ給はむはかなしくちおしとかつ

みつ／＼もた／＼我心につきすくせのひくかた侍め

れはおのこしもなむしさいなき物は侍めると申

せはのこりをいはせむとてさて／＼おかしかりける女哉

とすかひ給ふを心はえなからはなのわたりにおこつ

きてかたりなすさていとひさしくまからさりしに

もの／＼たよりにたちよりて侍れはつねのうちとけ

るたるかたには侍らて心やましき物こしにてな

むあひて侍りふすふるにやとおこがましくも又

26  
ウ

よきふしなりともおもひ給ふるにこのさかし人は

たかるくしき物えむしすへきにもあらずよのた  
 うりをおもひとりてつらみさりけりこゑもはやり  
 かにていふやう月ころふひやうおもぎにたへかねて  
 こくねちのさうやくをふくしていとくさきにや  
 りなむえたいめむしたまはらぬまのあたりならす  
 ともさるへからむさうし等はうけ給らむといとあは  
 れにむへくしくいひ侍りいらへになにとかはたうけ  
 給ぬとてたちいて侍にさうくしくやおほえけむ  
 このかうせなむ時にたちより給へとたかやかにいふを

27才

きくすくさむもいとおししはしたちやすらふへきに  
 はた侍らねはけにそのにほひさへはなやかにたちそ  
 へるもすへなくてにけめをつかひて

さゝかにのぶるまひしるきたくれにひるます  
 くせといふかあやなきいかなることつけそやといひも  
 はてすはしりいて侍ぬるにおひて

あふことの夜をしへたてぬ中ならはひるまも  
 なにかまはゆからましさすかにくちとくなどとは侍き

としつくと申せは君たちあさましとおもひてそら

ことゝてわらひ給いつこのさる女があるへきおいらかに

おにとこそむかひみたらめむくつけきことゝつまはしき

をしていはむかたなしと式部をあはめにくみてすこし

よろしからむことを申せとせめ給へとこれよりめつらしき

事は候なむやとておりすへておとこも女もわるものは

わつかに忘れるかたのことをのこりなく見せつくさむと

おもへるこそいとおしけれ三史五経の道くしき方を

あきらかにさとりあかさむこそあい行なからめなとかは

女といはむからに世にあることのおほやけわたくしにつ

けてむけにしらすいたらすしもあらむわさとならひま

ねはねともすこしもかとあらむ人のみゝにもめにもとまる

28才

ことしねんにおほかるへしさるまゝにはまむなをはしり  
 かきてさるましき中の女ふみにながはすきてかきす

すめるあなうたてこの人のたをやかならましかはと

見えたり心にはさしもおもはさらめとをのつからこは

27才

こはしきこゑによみなされなとしつゝことさらひたり  
 これは上らうの中にもおほかることそかしつたよむ  
 とおもへる人やかて哥にまつはれおかしきふること  
 をもはしめよとりこみつゝすましきおりくよ  
 みかけたるこそ物しき事なれ返事せねはなさけ  
 なしえせさらむ人ははしたなからむさるへきせちゑ  
 など五月のせちにはいそきまいるあしたなにあやめ  
 もおもひしつめられぬにえならぬねをひきかけ九  
 日のえんにまつかたき詩の心をおもひめくらしいと  
 まなきおりにきくのつゆをかこちよせなとやうの  
 つきなきいとなみにあはせさならてををのつから  
 けに後におもへはおかしくもあはれにもあへかりける  
 事そのおりにつきなくめにもとまらぬなとをゝし  
 はからすよみいてたる中く心をくれてみゆよろつ  
 ことになとかはさてもとおほゆるおりから時く思わかぬ  
 はかりの心にてはよしはみなさけたゝさらむなむめや

すかるへきすへて心にしれらむ事をもしらすかほ  
 にもてなしいはまほしからむことをもひとつふたつ  
 のふしはすすへきなむあへかりけるといふにも君  
 は人ひとりの御ありさまを心のうちにおもひつゝけ  
 給ふこれにたらず又さしすきたる事なく物し給  
 ひけるかなとありかたきにもいとむねふたかるいつ  
 かたによりはつともなくはてくはあやしき事とも  
 になりてあかし給つからうしてけふは日のけしき  
 もなをれりかくのみこもりさふらひ給ふもおほ殿  
 の御心いとおしければまかて給へりおほかたのけし  
 き人のけはひもけさやかにけたかくみたれたる所  
 ましらす猶これこそはかの人くすてかたくとり  
 いてしまめ人にはたのまれぬへけれとおほす物から  
 あまりうるはしき御ありさまのとけかたくつかしけ  
 におみ思しつまり給へるをさうくして中納言の  
 君中務なとやうのをしなへたらぬわか人ともにたは  
 ふれことなとの給ひつゝあつさにみたれ給へる御

ありさまをみるかひありとおもひきこえたりおとゝも  
 わたり給てうちとけ給へれば御木丁へたてゝおはし  
 まして御物語きこえ給をあつきにとにかみ給

30才

へは人くゝわらふあなかまとてけうそくによりおは  
 すいとやすらかなる御ふるまひなりやくらくなる  
 ほとに今夜なか月うちよりはふたかりて侍りけ  
 りときこゆさかしれいはいみ給かたなりけり二条院  
 にもおなしすちにていつくにかたかへむいとなやま  
 しきにとておほとのこもれりいとあしき事なりと  
 これかれきこゆきのかみにてしたしくつかうまつる  
 人中河のわたりなる家なむこのころ水せきいれ  
 てすゝしきかけに侍ときこゆいとよかなりなやまし  
 きにつしなからひきいれつへからむ所をとのたま  
 ふしのひくの御方たかへ所はあまたありぬへけれと  
 ひさしくほとへてわたり給へるにかたふたけてひき  
 たかへほかさまへとおほさむはいとおしきなるへし紀

30才

の守におほせことたまへはうけ給なからしりそきて  
 伊よの守の朝臣の家につゝしむこと侍て女房なむ  
 まかりうつれるころにてせはき所に侍れはなめけ  
 なる事や侍らむとしたになけくをきゝ給てその人  
 ちかゝらむなむうれしかるへき女とをきたひねはも  
 おそろしき心ちすへきをたゝその木丁のうしろ  
 にとの給へはけによるしきおまし所にもとて人

31才

はしらせやるいとしのひてことさらにことくゝしからぬ  
 ところをといそきいて給へはおとゝにもきこえ給はず  
 御ともにもむつまじきかきりしておはしましぬ守に  
 はかにとわふれと人もきゝいれすしむ殿のひんかしお  
 もてはらひあけさせてかりそのの御しつらひしたり  
 水の心はへなとさるかたにおかしくしなしたりゆ中  
 家たつしはかきしてせむさいなと心とゝめてうへた  
 り風すゝしくてそこはかとなきむしのこゑくゝき  
 こえほたるしけくとひまかひておかしきほとなり  
 人くゝわた殿よりいてたるいつみにのそきぬてさ

けのむあるしもさかなもとむとこゆるきのいそぎ  
 ありくほと君はのとやかになかめ給てかの中のしな  
 にとり出ていひしこのなみならむかしとおほしいつ  
 おもひあかれるけしきにきゝおき給へるむすめな  
 れはゆかしくてみゝとゝめ給へるにこのにしおもてに  
 そ人のけはひするきぬのをとなひはらゝとしてわ  
 かきこゑともにくからすさすかにしのひてものいひ  
 ゑわらひなとするけはひことさらひたりかつしをあけ  
 たりけれとかみ心なしとむつかりておるしつれば火  
 ともしたるすきかけさうしのかみよりもりたるに  
 やをらより給てみゆやおほせとひましなればは  
 しはしきゝ給にこのちかきもやにつとひぬたるな  
 るへしうちざゝめきいふことゝもをきゝ給へは我御  
 うへなるへしいといたうまめたちてまたきにやむ  
 ことなきよすかさたまり給へるこそさうゝしかめ  
 れされとさるへきくまにはよくこそかくれありき

32  
才31  
ウ

給なれなといふにもおほすことのみ心にかゝり給へ  
 れはまつむねつふれてかやうのつゐてにも人  
 のいひもらさむをきゝつけたらむ時なとおほえ  
 給ことなる事なければきゝさし給つ式部卿宮  
 のひめ君にあさかほたてまつり給し哥などを  
 すこしほゝゆかめてかたるもきこゆくつろきか  
 ましく哥すしかちにもあるかなと猶みをとりは  
 しなむかしとおほすかみいてきてとらうかけそ  
 へ火あかくかゝけなとして御くた物はかりまいれり  
 とはり丁もいかにそはさるかたの心もなくては  
 めさましきあるしならむとの給へはなによけん  
 ともえうけ給はらずかしこまりてさぶらふはし  
 つかたのおましにかりなるやうにておほとこのこ  
 れは人ゝもしつまりぬあるしの子ともおかしけ  
 にてありわらはなる殿上のほどに御らむしなれ  
 たるもあり伊よのすけの子もありあまたある

33  
才32  
ウ

中にいとけはひあてはかにて十二三はかりなるも  
 ありいつれかいつれなとこひ給にこれは衛門のかみ  
 のすゑの子にていとかなしくし侍りけるをおさなき  
 ほとにをくれ侍てあねなる人のよすかにかくて侍  
 なりさえなともつき侍ぬへくけしうは侍らぬを殿  
 上なともおもふ給ひけなからすか／＼しうもえ  
 ましらひ侍らさめると申あはれのことやこのあね  
 君やまつとの後のおやさなむ侍と申ににけ

なきおやをもまつけたりけるかなうへにもきこ  
 しめしをきて宮つかへにいたしてむともらし  
 そうせしをいかになりにけむといつそやの給はせ  
 し世こそさためなき物なれといとおよすけの給ぶ  
 ふいにかくてものし侍るなり世中といふものさ  
 のみこそいまもむかしもさたまりたる事侍ぬな  
 にも女のすくせはいとうかひたるなむあはれに  
 侍なときこえさすいよのすけはかしくや君とお  
 もぶらむないかゝはわたくしのしうとこそおもひて侍

33  
ウ

めるをすき／＼しきことゝなにかしよりはしめてうけ  
 ひき侍らすなと申さりとともまつとたちのつき／＼し  
 くいまめきたらむにおろしたてむやはかのすけ  
 はいとよしありてけしきはめるをやなと物かたり  
 し給つゝいつ方にそみなしもやにおろし侍ぬる  
 をえやまかりおりあへさらむときこゆゑいすゝみて  
 みな人／＼すのこにふしつゝしつまりぬ君はと  
 けてもねられ給はすいたつらふしとおほさるゝに  
 御めさめてこの北のさうしのあなたに人のけ  
 はひするをこなたやかくいふ人のかくれたるかたな  
 らむあはれやと御心とゝめてやをらおきてたちき  
 き給へはありつる子のごゑにてものけ給はるいつ  
 くにおはしますそとかれたるごゑのおかしきにて  
 いへはこゝにそふしたるまらうとはね給ぬるかいが  
 にちかからむとおもひつるをきれとけとをかりけり  
 といふねたりけるごゑのしとけなきいとよくにかよひ

34  
ウ34  
オ



たれはいもつとゞきゝ給つひさしにそおほとのごも  
りぬるをとにきゝつる御ありさまをみたてまつり  
つるけにこそめてたかりけれとみそかにいふひるな  
らましかはのそきてみたてまつりてましとぬふた  
けにいひてかほひきいれつるこゑすねたう心とゞめ

てとひきけかしとあちきなくおほすまろはこゝに  
ね侍らむあなくるしとて火かゝけなとすへし女きみ  
はたゝこのさうしくちすちかひたるほとにそふし  
たるへき中将の君はいづくにそ人けとをき心地し  
てものおそろしといふなれはなけしのしもに人く  
ふしていらへすなりしもにゆにおりてたゞいま  
いらむと侍といふみなしつまりぬるけはひなれは  
かけかねを心みにひきあけ給へれはあなたより  
はさゝさりけりき丁をさうし口にたてゝ火はほ  
のくらきに見給へはからひつたつ物ともをゞき

たれはみたりかはしき中をわけいり給てけはひ

35  
才35  
ウ

しつる所にいり給へれはたゞひとりいとさゝやかにて  
ふしたりなまわつらはしけれとつへなるきぬをゝ  
しやるまでもとめつる人とおもへり中将めしつれ  
はなむ人しれぬおもひのしるしある心ちしてと  
の給をともかくもおもひわかれす物にをそはるゝ  
心ちしてやとおひゆればかほにきぬのさはりて  
をとにもたてすうちつけにぶかゝらぬ心のほとゝ  
見給らむことほりなれと年ころおもひわたる心の  
うちもきこえしらせむとてなむかゝるおりをまちいて

たるもさらにあさくはあらしとおもひなし給へと  
いとやはらかにの給ておにかみもあらたつましき  
けはひなれははしたなくこゝに人ともえのゝしらす  
心ちはたわひしくあるましき事とおもへはあさま  
しく人たかへこそ侍めれといふもいきのしたな  
りきえまとへるけしきいと心くるしくらうたけ  
なれはおかしと見給てたかふへくもあらぬ心のしるへ  
をおもはずにもおほめい給かなすきかましきさ

36  
才

まにはよに見えたてまつらしおもふ事すこし

きこゆへきそとていとちいさやかなれはかきいた

きてさうしのもといて給にそもとめつる中将たつ

人きあひたるやゝとの給にあやしくてさくりよりた

るにそいみしくにほひみちてかほにもくゆりかゝる心

ちするにおもひよりぬあさましうこはいかなる事そ

とおもひまとはるれときこえむかたなしなみ／＼の人

ならばこそあらゝかにもひきかなくらめそれたに人

のあまたしらむはいかゝあらむ心もさはきてしたひ

きたれととももなくておくなるおましにிரり給ぬさう

しをひきたてゝあかつきに御むかへに物せよとの給

へは女はこの人のおもふらむ事さへしぬはかりわりな

37  
才

きになかるゝまであせになりていとなやましけなる

いとおしけれとれいのいつくよりとつて給ことの葉に

かあらむあはれしるはかりなきけ／＼しくの給つくす

へかめれとなをいとあさましきにうつゝともおもほえず

36  
才

こそかすならぬ身なからもおほしくたしける御心の

ほともいかゝあさくはおもふ給へさらむいとかやつなる

きはゝきはとこそ侍なれとてかくをしち給へる

をふかくなきけなくうらめしとおもひいりたる様

もけにいとおしく心はつかしきけはひなれはその

きは／＼をまたしらぬういことそや中／＼をしなへた

37  
才

るつらにおもひなし給へるなむつたてありけるをの

つからきゝ給やうもあらむあながちなるすき心はさ

らにならぬをさるへきにやけにかくあはめられたて

まつるもことはりなる心まとひを身つからもあやし

きまでなむなとまめたちてよろつにの給へといた

くひなき御ありさまのいよ／＼うちとけきこえむ事わひ

しければすくよかに心つきなしとは見えたてまつる

ともさるかたのゆふかひなきにてすくしてむと思つ

れなくのみもてなしたり人からのたをやきたるにつ

よき心をしめてくはへたればなよ竹の心ちしてさす

38  
才

かにおるへくもあらずまことに心やましくてあな  
 ちなる御心はへをいふかたなしとおもひてなくさま  
 なといとあはれなり心くるしくはあれと見ざらまし  
 かはくちおしからましとおほすなくさめかたく  
 しとおもへれはなとかくしもうとましきものに  
 しもおほすへきおほえなきさまなるしこそち  
 きりあるとはおもひ給はめむけに世をおもひしら  
 ぬやうにおほほれ給なむいとつきとつらみら  
 れていとかくつき身のほととさたまらぬありし  
 なからの身にてかゝる御心はへを見ましかはある

38  
ウ

ましき我たのみにて見なをし給のちせもやと  
 おもひ給へなくさめましをいとかうかりなるつきねの  
 ほとをおもひ侍にたくひなくおもひ給へまとはるゝな  
 りよしいまは見きとなかかけそとおもへるさまけに  
 いとことはりなりをるかならず契なくさめ給ふ事  
 おほかるへしとりもなきぬ人ゝおきいてゝいとぬき  
 たなかりけるよかな御くるまひきいてよなといふ也

かみもいてきて女などの御かたかへこそ夜ふかくい  
 そかせ給へきかはなといふ君は又かやうのついであ  
 らむこともいとかたしきはへてはいかてか御ふみなと

39  
オ

もかよはむ事のわりなきをおほするにいとむねいたしお  
 くの中將もいてゝいとくるしかればゆるし給ても又ひき  
 とゝめ給つゝいかてかきこゆへきよにしらぬ御心のつらさま  
 あはれもあさからぬ世のおもひ出はさまゝめつらかなる  
 へきためしかなとてうちなき給御けしきいとなまめき  
 たり鳥もしはゝなくに心あはたゝしくて

つれなきをうらみもはてぬしのゝめにとりあへぬ

まておとろかすらむ女身のありさまをおもふにいとつき  
 なくまはゆき心ちしてめてたき御もてなしもなにとも  
 おほえすつねはいとすくゝしく心つきなしとおもひあな  
 つる伊よのかたのみおもひやられて夢にやみゆらむと  
 そらおそろしくつゝまし

39  
ウ

身のうさをなけくにあかてあくる夜はとりかさね

てそねもなけれけることゝあかくなればさうしくちまてを  
くり給うちもとも人さはかしければひきたてゝわかれ  
いり給ほと心ほそくへたつる聞と見えたり御なをしなと  
き給てみなみのかうらむにしはしうちなかめ給にしおもて  
のかうしそゝきあけて人ゝのそくへかめりすのこの中の  
ほとにたてたるさうしのかみよりほのかに見え給へる  
御ありさまを身にしむはかりおもへるすき心ともあめり

40才

月はあり明にてひかりおさまる物からかけさやかに  
見えて中ゝおかしきあけほのなりな心なき空  
のけしきもたゝ見る人からえむにもすくもみゆ  
るなりけり入しれぬ御心にはいとむねいたくことつ  
ていれむよすかたになきをかへりみかちにていて  
給ぬ殿にかへり給てもとみにもまとるまれ給  
はず又あひみるへきかたなきをましてかの人の  
思ふらむ心のうちをいかならむと心くるしくおもひ  
やり給ふすくれたる事はなけれとめやすくももて  
つけてもありつる中のしななくまなくみあつ

40ウ

めたる人のいひしことはけにとおほしあはせられけ  
りこのほとはおほとのにのみおはします猶いと  
かきたえておもふらむことのいとおしく御心にかゝりて  
くるしくおほしわひてきのかみをめしたりかのあ  
りし中納言の子はえさせてむやらうたけに見  
えしを身ちかくつかう人にせむうへにもわれたて  
まつらむとの給へはいとかしこきおほせことに侍なり  
あねなる人への給ひみむと申すもむねつふれ  
ておほせとそのあね君は朝臣のをとうとやも  
たるさも侍らすこの二とせはかりかくてものし侍

41才

れとおやのをきてにたかへりとおもひなけきて心  
ゆかぬやうになむきゝ給ふるあはれのことやよろし  
くきこえし人そがしまことによしやとの給へはけ  
しうは侍らざるへしもてはなれてうとゝしう  
侍れは世のたといにてむつれ侍らすと申さて五六  
日ありてこの子あてまいれりこまやかにおかしとは

なけれとなまめきたるさましてあて人と見えたり  
 めしいれていとなつかしくかたらひ給わらは心ち  
 にいとめてたくうれしとおもふいもうとのきみのこ  
 ともくはしくとひきよて給さるへきことはいらへきこ

41ウ

えなとしてはつかしけにしつまりたればうちいてに  
 くしされといとよくいひしらせ給かゝることこそとほ  
 の心うるもおもひのほかなれとおさなき心ちにふかく  
 しもたとらす御ふみをもてきたれば女あさま  
 しきになみたまいてきぬこの子のおもふらむこと  
 もはしたなくてさすかに御ふみをおもかくしにひ  
 ろけたりいとおほくて

見しゆめをあふ夜ありやとなけくまにめさへ  
 あはてそころもへにけるぬる夜なればなとめもを  
 よはぬ御かきさまもめもきりて心えぬすくせうちそ

42オ

へりける身を思つゝけてふし給へりまたの日小君  
 めしたればまいるとて御かへりこぶかゝる御ふみみるへき

人もなしときこえよとの給へはうちゑみてたかふへ  
 くもの給はさりしものをいかゝさは申さむといふ  
 に心やましくのこりなくの給はせしらせてけるとお  
 もふにつらきことがきりなしいてをよすけたること  
 はいはぬそよきさはなまいり給ひそとむつかられ  
 てめすにはいかてかとてまいりぬきのかみすき心に  
 このまゝはの御ありさまをあたらしき物におもひ  
 てついせつしありけはこの子をももてかしたきて

42ウ

ゐてありく君めしよせてきのふまちくらしゝをな  
 をあひおもふましきなめりとえむし給へはかほうち  
 あかめてゐたりいつらとの給にしかくゝと申にいふか  
 ひなのことやあさましとて又も給へりあこはしらし  
 なその伊よのおきなよりはさきに見し人そさ  
 れとたのもしけなくひほそしとてふつゝかな  
 るうしろみまうけてかくあなつり給なめりざりとも  
 あこは我子にてをあれよかのたのもし人はゆく  
 さきみしかゝりなむとの給へはさまやありけむいみ

しかりけることかなとおもへるおかしとおほすこのこを

43才

まつはし給てうちにもゐてまいりなとし給ふわか

御くしけ殿にの給てさうそくなともせさせまことに

おやめきてあつかひ給御ふみはつねにありされ

とこの子もおさなし心よりほかにちりもせはかる

かるしき名さへとりそへむ身のおほえをいとつ

きなかるへくおもへはめてたきことも我身からこそ

と思てうちとけたる御いらへもきこえずほのかな

りし御けはひありさまはけになへてにやはとお

もひ出きこえぬにはあらねとおかしきさまをみえ

たてまつりてもなにゝかはなるへきなとおもひかへ

43才

すなりけり君はおほしをこたる時のまもなく心

くるしくもこひしくもおほしいつおもへりしけし

きなどのいとおしさもはるけむ方なくおほしわた

るかるくしくはひまきれたちより給はむも人め

しけからむ所にはひむなきふるまひやあらはれん

人のためもおしくおほしわつらふれいのうちに

日かすへ給ころさるへきかたのいみまちいて給てに

はかにまかて給まねしてみちのほとよりおはしまし

たりきのかみおとるきてやり水のめいほくとかし

こまりよろこぶこ君にはひるつかたよりかくなむ

思よれるとの給ちきれりあけくれまつはしならし

給ければ今夜もまつめしいてたり女もさる御せう

そこありけるにおほしたはかりつらむほとはあさ

くしもおもひなされねとさりとてうちとけ人け

なきありさまをみえたてまつりてもあちきなく

ゆめのやうにてすきにしなけきを又やくはへむ

とおもひみたれてなをさてまちつけきこえさせむ

ことのまはゆければ小君かいてゝいぬるほどにいと

けちかければかたはらいたしなやましければしのひ

てうちたゝかせなともせむにほとはなれてをとて

わた殿に中将といひしかつほねしたるかくれにつつ

44才

44才

るひぬさる心して人どくしつめて御せうそこあれ  
 と小君はえたつねあはすよるつの所もとめあり  
 きてわた殿にわけいりていかにかひなしとおほさむ  
 となきぬはかりいへはかくけしからぬ心はつかふ物か  
 おさなき人のかゝる事いひつたふるはいみしくい  
 む物をといひおとして心ちなやましければ人く  
 さけすをさへさせてなむときこえさせよあやしと  
 たれもくおもふらむといひはなちて心の中にはいと  
 かくしなさまりぬる身のおほえならてすきにし  
 おやの御けはひとまれるふるさとながらたまさかにも  
 まちつけたてまつらはおかしくもやあらまししゐて  
 おもひしらぬかほにみけつもいかにほとしらぬやうに  
 おほすらむと心なからむむねいたくさすかにおもひ  
 みたるとてもかくてもいまはいふかひなきすくせな  
 りければむしんに心つきなくてやみなむとおも  
 ひはてたりきみはいかにたはかりなさむとまたお  
 さなきをつしるめたく待ふし給へるにふよう

45才

なるよしをきこゆればあさましくめつらかなりける  
 心のほとを身もいとほつかしくこそなりぬれとい  
 とくおしき御けしきなりとはかりもの物の給はず  
 いたうつめきてうしとおほしたり  
 はく木きの心もしらてそのはらのみちにあやな  
 くまとひぬるかなきこえむかたこそなけれとの給へり  
 女もさすかにまとるまさりけり  
 かすならぬふせやにおふる名のうさにあるにも  
 あらすきゆるはくきとときこえたり小君いとくおしさ  
 にねふたくもあらてまとひありくを人あやしと見る  
 らむとわひ給れいの人々はいきたなきにひと所  
 すゝるにすさましくおほしつづけらるれと人にぬ心  
 のさまのなをきえすたちのほれりけるとねたくかゝる  
 につけてこそ心もとまれとかつはおほしなからめさまし  
 くつらければさはれとおほせともさもえおほしはつ  
 ましくかくれたらむところにたになをいていけとの給

45ウ

46才

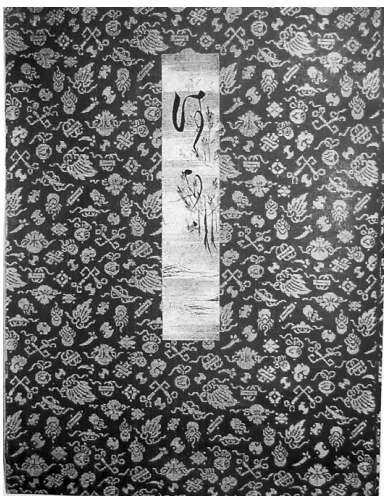
へといとむつかしけにさしこめられて人あまた侍めれ  
はかしこけにときこゆいとおしとおもへりよしあこた  
になすてそとの給て御かたはらにふせ給へりわか  
くなつかしき御ありさまをうれしくめてたしと  
おもひたれはつれなき人よりはなか／＼あはれにおほ  
さるこそ



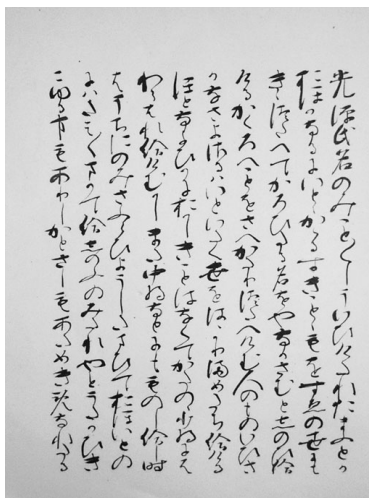
注

- (1) 「長谷川端蔵『源氏物語』源氏物語筆者目録 源氏物語秘訣」、『文学部紀要』第四七卷二号（中京大学文学部 平成二五年三月）
- (2) 「長谷川端蔵『源氏物語』昌琢筆 桐壺」、『文学部紀要』第四八卷一号（中京大学文学部 平成二五年一〇月）
- (3) 「長谷川端蔵『源氏物語』西山宗因筆 紅葉賀」、『文学部紀要』第四六卷二号（中京大学文学部 平成二四年三月）
- (4) 「長谷川端蔵『源氏物語』西山宗因筆 宿木」、『文学部紀要』第四七卷一号（中京大学文学部 平成二四年一〇月）
- (5) 正宗敦夫氏編纂『顯伝明名録』下（日本古典全集刊行会 昭和一三年二月）
- (6) 村井蔵。
- (7) 乾裕幸氏校注『古典俳文学大系一 貞門俳諧集一』（集英社 昭和四六年三月）。鷗沢芳松氏校訂『俳諧文庫第二十編 俳諧逸話全集』（博文館 明治三三年八月）も参考。この部分について、乾裕幸氏「里村両家の俳壇確執 俳諧論戦史の内」、『会報』（大阪俳文学研究会）第八号（昭和四九年九月）には、  
北家三代の若い玄陳にとつて、祖父紹巴の息のかかつた貞徳は、とかく煙たい存在であつたにちがひなく、右のやうな場面も時には見得たかと思はれる。  
とある。
- (8) 福井久蔵氏『連歌の史的研究』（有精堂 昭和四四年一二月）「第三十九 徳川幕府の御連歌師」に、玄陳の連歌について、「二元和寛永頃の作が多く、出藍の誉れがあつた。」と記す。
- (9) 注2に同じ。
- (10) 注3に同じ。
- (11) 連歌総目録編纂会編『連歌総目録』（明治書院 平成九年四月）をもとに、連歌会の月日に異同がある場合は、注8の本に従つた。

- (12) 村井蔵。
- (13) 「玄仍筆『源氏物語註』上冊」、『文学部紀要』第四四卷二号(中京大学文学部 平成三年三月)  
「玄仍筆『源氏物語註』中冊」、『文学部紀要』第四五卷一号(中京大学文学部 平成三年一〇月)  
「玄仍筆『源氏物語註』下冊」、『文学部紀要』第四五卷二号(中京大学文学部 平成三年三月)
- (14) 写真 「瑞籬にひさしくちらぬ紅葉かな 玄陳」は、駒田蔵。  
写真 「冬かれて霜に花野の果もなし 玄陳」は、村井蔵。
- (15) 飯島春敬氏編『書道辞典』(東京堂出版 昭和五〇年四月)「定家様」
- (16) 小松茂美氏『古筆』(講談社 昭和四七年八月)「切の養生と古筆手鑑」
- (17) 正宗敦夫氏編纂『古今名物類聚』下(日本古典全集刊行会 昭和一四年一〇月)
- (18) 徳川美術館・根津美術館編『名物茶器 玩貨名物記と柳営御物』(徳川美術館他 昭和六三年一〇月)
- (19) 国書刊行会編『日本書画苑 第二』(国書刊行会 大正四年一二月)
- (20) 北村佳逸編『名家鑑定美術必携 日本画人伝』卷六(明治二八年四月)
- (21) 三浦周行監修『堺市史』第三卷第四編(清文堂出版株式会社 昭和五年六月)
- (22) 三浦周行監修『堺市史』第七卷第一編(清文堂出版株式会社 昭和五年六月)
- (23) 『続本朝画史』は、鑑定家松山坦斎(一七七四—一八四二)が本書を継ぎ、文政二年(一八一九)出版。
- (24) 石田誠太郎『日本書画名家編年史』八冊(出版元は石田孝介 大正三年)
- (25) 『国書総目録』著者別索引(岩波書店 昭和五年一二月)
- (26) 奥田勲氏『連歌師 その行動と文学』(評論社 昭和五年六月)「連歌師のゆくえ」
- (27) 桑田忠親氏『茶道の歴史』(講談社学術文庫 昭和五四年一二月)「茶道の格式化」
- (28) 注27に同じ。

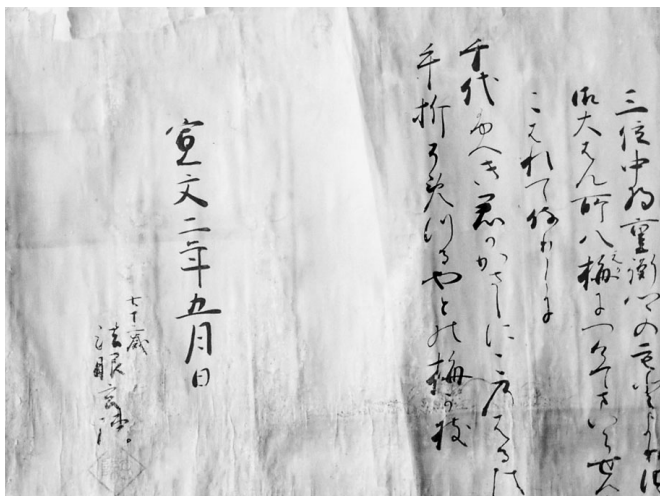


帚木巻 表紙



帚木巻 1才





忠度百首 卷末



短冊



短冊